

あとがき

佐竹 晶子

本誌を読んでいると、大学教師がそれぞれ好きな題材や話題で授業をし、その情熱が学生に伝わるはずだ、伝わらなければ、それはそれで学生の勝手と開き直る、そうした時代は過去のものとなるのだなと感じる。社会系や自然科学系では次の段階に進む前に修得しなければならない項目がはっきりしているから有り得ないことなのかもしれないが、私の知っている文学の授業では、教えるべきことというのは先生の中でもかなり漠然としていて、学生は自分で興味ある本をこつこつ読むという仮定のもとに大学教育がなりたっていた気がする。それは、意欲のある学生にとっては、小西先生曰く「無駄」を潜り抜け、豊かな教育となる可能性を秘めていた反面、私のような自主性のない学生は、手解きなしで何も修得せず卒業してしまう危険も孕んでいた。要するに、今日のように各科目で学修目的を確定し、それを最も効果的に達成するための授業形態と方法を開拓する努力が払われていなかったであろう。

それでは現代の理想の授業とはいかなるものかと学生に語らせたのが本号の座談会であるが、答えはまさしく「アクティブ・ラーニング」と言えるようだ。そこで挙げられた授業例では、企業や地域の人たちとの(1)コミュニケーション、問題解決の企画や冊子作成などの(2)アウトプットと、シンポジウムで提唱されていた要素が最大限に生かされている。ただし、忘れてならないのはもう一つ、主体的となるためには学習者の中で知識の関係付け、(3)体系化が不可欠であることを溝上氏は述べていて、この点を座談会では教員側がしきりにつついている。問題解決に走る前に何故問題が存在するのか問うてみよう、その場凌ぎではない、カリキュラム・デザインを参考にした授業選択をしようと。

立教の先生は頑張っていると思う。名前からしてアクティブなディスカッションクラス、ネイチャー・キャンプを始め、勉強の仕方を体系的に教える学部演習の様々な工夫、ネットを使って学生の発表準備段階からのアドバイス、更には、一見、機械的なeラーニングでさえ、馴らし打ち、息抜きと学生のニーズを考えて目的に合わせた教材を先生が作成している。学生同士、学生と社会の間だけではなく、教員が学生のことを考えてリーチアウトする、これも授業におけるコミュニケーションの一つであるのかなと考えさせられる。

さたけ あきこ

(本学異文化コミュニケーション学部准教授／
全学共通カリキュラム運営センター教育研究・広報委員／
英語教育研究室室員)